

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390200701		
法人名	株式会社 アクティブ・ケア		
事業所名	グループホームみのり倉敷		
所在地	倉敷市日吉町347-1		
自己評価作成日	平成30年11月19日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート		
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館		
訪問調査日	平成30年11月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

札幌の本社から研修担当の職員が来訪し、PDCA研修を年4回実施しています。また、月に一度はユニット会議を開催して情報交換の場に行っています。この中で、虐待・拘束等の内部研修も取り入れています。利用者は、毎日の日課にリハビリ体操やレクリエーションをユニット単位で行ったり、両ユニット合同で行って交流を図ったりしています。他には曜日で歌唱倶楽部を週2回、習字教室を週2回開催しています。基本的には、強制ではなく参加したい方が参加するようにしています。その他余暇時には個別で散歩に行きます。月に一度の外出での昼食も利用者職員との楽しみになっています。建物内には訪問看護ステーションが併設されており、本人・家族が希望されれば看取りを行うことが出来ます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2年くらい前までは利用者の様子を見るとミニ特養のような状況だったが、特養の順番が来て数人が退所し、新しく軽度の人が入所した事により、活気のあるホームになった。それに加え昨年9月にはホーム長が新しく就任し、職員もこの2年間で大半が変わり「新生グループホームみのり倉敷」がスタートした。まず両ユニットの責任者を作る事から始めたホーム長は、他ホームでの経験豊かな実績を活かし、職員一人ひとりが考えるケアの体制作り、モチベーションを高く持った職員と皆で協力体制を築き、利用者にとって居心地の良いホームにしたいと日々奮闘している。これからの課題は人材育成。意識の高い職員もいるのでユニットの中心になる人材を育てていきたいと熱い抱負を聞かせてもらった。マンパワー不足だった事もあったが、現在は補充も出来て新規職員を現場で教育していると聞いた。これからの「新生みのり倉敷」に大いに期待しています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員が理念を理解することに努め、理念に基づいたケアプランが作成できるように努力をして、日々のケアに取り組んでいる。	ホームの理念の他に、職員個々で1年間の目標を掲げており、ホーム長が交代して新体制になった昨年度から職員一人ひとり自分で考え実践するケアを重点に置き、ユニットリーダーを中心とした活動を展開しようとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩に出たときには地域住民の方々に挨拶をし、交流を図っている。秋祭りには子供神輿が今年も訪れた。地域の保育園との交流会を設けたり、保育園の運動会に招かれたりと交流の機会を積極的に設けている。	設立当初から町内会の理解と協力があり、役員 の改選があってもずっと良い関係が続いており、ホーム長が総会に参加している。敬老会では保育園児との楽しい交流があり、地域の人も畑で採れた米や野菜の差し入れをしてくれる等、地域の中のグループホームという位置付けが出来ている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	見学や申し込みに来られた方のお話を聞いて必要なサポートをしている。また、高齢者の二人暮らしで一人が入居になったら、残った一人の生活が大丈夫なのか確認をしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一度当ホームにて運営推進会議を開催しホームでの活動報告はもとより、ご家族・町内会長・民生委員・地域包括職員・近隣のGH管理者からの率直な意見をホームの運営に生かすように努めている。	運営推進会議は土曜日に開催しているが、地域包括の職員の参加も得られ、地域の人、家族、他ホームの管理者等の参加者と共に意見交換をして有意義で活発な会議を開催している。議題にもある災害時の避難については今後も会議の中で話し合っていく事になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センターの職員の運営推進会議参加時には、ホームの現状報告を行うとともに情報提供を受けている。	市主催の研修会への参加はもちろんの事、市の実地指導での助言や指導を受け、変更届等の書類関係の提出も行なっている。土曜日開催にも係わらず運営推進会議に毎回地域包括の参加があるので良い連携がとれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ユニット間の行き来は自由で、日中は玄関を施錠することなく解放している。「行動を制限しない」ケアを実践するべく外に出るのを止めるのではなく一緒に行動し安全面に配慮している。「待つ」などの言葉の拘束にも注意している。	運営推進会議の中で身体拘束適正化検討委員会を開催し、例外3原則について話し合ったり、「言葉による拘束」も禁止項目に加えた。職員に身体拘束に関するアンケートをして、接し方や言葉使い等について振り返りを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待は暴力をふるう身体的虐待以外に言葉や態度、介護拒否が虐待に含まれることを職員に伝え防止に努めている。月に一度のユニット会議の中で内部研修を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、成年後見制度を利用されている方がいるので、その方のいるユニットの職員は理解出来ていると思う。制度についての知識と理解が正しく出来るように職員研修に取り入れていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の前の面談時に、疑問や質問に納得されるまで説明するように努めている。又、入居時には重要事項説明書によりさらに細やかな説明を行い同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	電話や面会時に日頃の様子を細やかに伝え、情報の交換・共有に努め、本人・家族の意見や苦情に速やかに取り組むように努めている。又、毎月発行する広報誌にてホームの運営状況を伝えている。	敬老会には殆どの家族の参加があり利用者と一緒に食事をしながら歓談している。ホームの行事や生活の様子は「みのり通信」でお知らせしているし、家族には面会時や何かあればその都度電話で状況報告をしている。	折角家族が集まる機会なので、食事会だけに留まらず、家族会のような形に持って行き、交流・懇談を基本としながらも、運営に関する意見交換の場としても良いのではないかと。意見が言いやすい雰囲気作りが大切と思う。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	GH会議・ユニットミーティングにて職員の意見交換の場を設けている。また、問題のありそうな職員には周りの職員から話を聞いて、本人からも直接話を聞くようにしている。	開設当初から3ヶ月に1回、本社から職員が来て職員研修を実施している他、毎月のユニット会議でも職員間でケア内容や業務に関する事を話し合っている。勤務年数の浅い職員が多いので、日々の業務を通して人材育成を図っている現状と聞いた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課表・自己評価表により給与・賞与に反映される仕組みがあり、やりがいのある職場環境作りに役立てたい。本人の希望を出来るだけ上司に伝えるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得希望者には、会社から資格費用貸与の制度がありバックアップしている。職員数に余裕があれば外部研修にも積極的に参加出来るように支援していきたい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修等により、交流の場を得ると共に情報交換が行えるように取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居までに自宅訪問し、在宅生活がどのようなものか確認する。入居当初は出来るだけ、本人のペースで生活してもらい、課題を見つける。そして声掛けをしながら、安心できる場所の提供と信頼関係作りに努める。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学をしてもらいホームの役割と特徴の説明を行うと同時に、入居を考えるに至った問題点(困っていることや不安など)を傾聴するように心がけている。又、入居前の自宅訪問時にもしっかりと話を聞き信頼関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	担当ケアマネ・病院MSW・地域包括支援センターとの情報の共有化と連携に努め、一番必要なサービスの見極めに努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事は出来る方に声をかけて一緒にしてもらおう。退屈そうにしている方がいたら、「一緒に散歩に行きませんか」と声をかける。夜間、トイレに起きてくる方が不安を訴えたと「今日はずっといるから大丈夫よ」と声をかける。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	体調が悪くなったり、気になる事があつたら家族に電話をしている。特に本人が何か希望していることがあれば必ず伝えるようにしている。一か月に一回広報誌を郵送しホームの活動に理解を得られるように努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住んでいた自宅の近所の方が訪ねてくることがあるので、温かく迎えて居室で過ごしていただき、おもてなしをする。	懐かしい場所、思い出の場所にドライブに行っても喜ばれる事もあり、出来る限りその人の行きたい場所に行くようにしている。家族、知人、友人等が気軽に面会に来やすい環境作りをし、馴染みの人との関係継続の支援を心がけている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人一人の性格やこだわりを見極め気の合う仲間作りの支援(席やテーブルのレイアウト等の配慮)に努め、トラブル発生時には問題解決に努め、入居者同士の良好な人間関係が構築できるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後の生活に支障がないように、地域包括支援センターや担当ケアマネに必要な情報提供を行い介護サービスが途切れないように配慮している。退去後に変更申請を行うこともある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思表示の出来ない方には、家族の意向を聞くことを基本にしている。その上で長年ホームで暮らしている方は、職員がこの方だったらどうするか、どう思うかを職員何人かで検討するようにしている。	「人に触れられたくない。自分の事は自分でしたい」と言う人には、安全面に留意しながら意向に沿った自立支援をし、畑仕事が生きがいの人には役割を持ってもらう等、日々の関わりの中で思いを聞き出し出来る限り本人の意向や希望を叶えるように努めている。	介護記録はきちんと記録されているが、生活行動と支援内容が大半であり、利用者の精神面・心理面の記述が少ない。意思表示の難しい人には職員が心の内を推察してその思いを記録に残すと共に本人の意向としてプランに反映して欲しい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生まれてから現在に至るまでの生活歴の聞き取りはもちろんのこと、入居に至るまでに利用されていた介護サービスの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別性を重視しホームの時間割ではなく、一人一人に合った時間配分に努めている。精神状態・身体状態の日々の変化を細やかに観察するように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意向確認はもとより、主治医・訪問看護のアドバイス等を参考にしている。担当者がモニタリングを行い、計画作成担当者が作ったケアプランを、ユニット会議の中で検討している。	両ユニットの計画作成担当者も交代し、利用者も新規入所が増えた事から、これまでよりプランの内容がより具体的なものへ改善されている。本人・家族の意向を基本に、生活へのニーズ(課題)を抽出する時には精神面を取り上げ「心のケア」の充実を図って欲しい。	生活の質を高めるにはADLの維持、向上も必要だが、本人が望む生活とは何かを重点に置き、ニーズを抽出して、身体面だけでなくもっと精神面をプランにあげて欲しい。今後のプランに期待している。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のケース記録は出来るだけケアプランに沿ったものであるよう、短期目標を記録のページにつけている。日々の状況を記録に残し、職員間で情報共有することでケアの統一を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況に応じて(遠距離や身元引受人が兄弟など)通院や買い物など必要に応じて判断し対応を心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	散歩時に地域住民の方と会話を交わしたり、運営推進会議では地元の町内会長や民生委員から地域の情報を教えてもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は特に指定はしていない。本人、家族の希望があれば聞いているが、外来受診は家族に協力をお願いしている。	3ヶ所の医療機関との協力体制があり、往診はもちろん、緊急時には24時間体制で対応してもらえる。ホーム建物内に訪問看護ステーションがあるので、週1回の健康管理に加え、何かあれば気軽に相談出来るので職員も利用者も心強い。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	概ね週一回、訪問看護師が健康チェックを行っている。一週間の身体状態の変化を記録で伝え、訪問看護師との連携を図っている。緊急時には、同じ建物の中に訪問看護ステーションが併設されているので緊急対応できている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、病院関係者に情報提供を行っている。又、入院中は、病院のMSWとの情報交換はもとより、家族の同意のもと主治医のカンファレンスに同席し情報の共有化に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に看取りの指針の説明を行い理解を得る努力をしている。看取りの時期が来た時には、繰り返し本人・家族の意向を確認している。24時間体制の訪問診療医も契約時から身体状態の変化に合わせて看取りの説明をその都度している。	これまでも看取りを実施してきたが、今年に入ってから2名の人をホームから見送った。その内1名は老衰による自然な最期だった。主治医、家族、職員が連携して医療・ケア方針等をよく話し合っている。現在もターミナル状態の人が1名いるが、急変時の意向確認もしており、出来る限りの支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	特に夜間の緊急事態が発生した場合の連絡の取り方はユニット会議で何度か確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	社内会議、運営推進会議の中で災害対策について話し合いを持ち、年2回、昼夜を想定した避難訓練の実施を行い、消防署の職員にも参加、指導してもらったときもある。	会議の中で家族から避難弱者についての話が出て、市にも問い合わせた経緯がある他、この地域は防災意識が高く、町内で防災組織に関する会議の予定もあるとの事。水害時等のホーム周辺の避難場所としては、倉敷駅が一番無難と聞いた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者への呼びかけは、苗字や名前に「さん」付けを基本としている。利用者は目上の方なので、子供に対するような声掛けをしない。介助が必要な方でもトイレのドアは必ず閉めるなど、基本的なことを気を付けている。	自尊心、羞恥心への配慮やプライバシー保護を重視し、利用者個々の人格を尊重するよう努めている。勤務年数の浅い職員が多いので、接遇に関する対応や研修が十分とはいえない点もあるが、ホーム長が中心となり職員間で注意喚起を促している。	羞恥心への配慮がある場面は排泄や入浴介助時と思うので、トイレへの声かけ一つにしても耳元で言うとか、違う言葉で誘導する等の細やかな配慮がもっとあっても良いと思える。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	画一的な支援にならないように個々の気持ちを聞く時間を設けるように努めている。日々の生活の中で、皆同じではなく自ら選択することのできる質問形式での声掛けを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	精神面・身体面の変化に配慮しながら、生活のリズム・パターンを考慮し、ホームの業務を優先するのではなく、本人が暮らしやすい時間配分にその都度変化するように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理美容を利用しカット・毛染め・パーマを行っている。本人の好みを尊重した洋服選びやアドバイスを行うように心がけている。季節の衣類の交換は家族に協力をお願いしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	誕生日には本人の好みを聞き献立を立てている。食事作りは、下ごしらえ・配膳・下膳・食器拭き片付けなど職員と協力しながら行っている。月に一度の外出は本人にメニューから選んでもらっている。	マンパワー不足等もあり昨年から外部業者に食材の委託をしている。今年初めて夏祭りにBBQをして利用者に喜ばれたり、昼食専門の調理担当職員もいるので、他の職員は助かるという話を聞いた。水分摂取量には特に気をつけており複数の人に寒天ゼリーが一品多く添えられている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日のメニュー、そのための食材は業者に配達してもらっている。時々、お寿司やお弁当を配達してもらっている。食事量・水分量は記録をして、変化があれば主治医に相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きを実施している。本人の能力に応じた支援を行い、口腔内の観察はもとより、義歯の不具合や虫歯・歯槽膿漏などは訪問歯科を利用し治療を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者ごとにトイレ誘導の時間をその方に合わせて行っている。日中は布パンツにパットの利用者も多い。車椅子の利用者も二人介助でトイレに座ってもらっている。	軽度の人が多いユニットでは日中は全員が布パンツ或いはパットで過ごしており、職員が一人ひとりの排泄リズムを把握して細やかな声かけとトイレ誘導をしている。重度の人が多いユニットでも、職員が2人で連携しながら排泄介助をしている場面を見かけた。	排泄の自立度が高い人もいれば、リハビリパンツでかぶれる人もいる等、様々な理由があるが、9人全員が日中布パンツで過ごしている例は他のホームではそう多くは見かけない。職員の日々の取り組みの賜物であろう。今後もこの状態をしっかりキープしてあげて下さい。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者ごとの排便パターンを検討して、適切な薬の処方と服用を行っている。又、繊維質の食材(寒天)を積極的に使用したり、乳製品の摂取、水分摂取、運動を心がけています。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回を基本とし入浴日は決めているが、体調や本人の希望や入浴のタイミングに配慮しながら柔軟な対応を心がけている。	その日の体調によってシャワー浴にする人はいるが、殆どの方は浴槽にゆっくり浸かって入浴タイムを楽しんでいる。午前・午後入浴時間を設け、同性介助を必要とする人も特にない。声かけをしても入浴拒否がある人には、いったん引き下がり時間や人を替えて対応しているので、困るような事例はないと聞いた。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間は特に決めておらず自由で、本人の生活のリズムに合わせている。夜間不眠の方には、状況に合わせた対応を心がけている。又、日中活動の見直しを行い良眠できるように工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	疾患と薬についての理解に努め、薬の用量や服薬するタイミングなど、医師・薬剤師と密なる情報交換及び連携を図っている。最新の処方薬の説明書のファイルをユニットに置き、いつでも見られるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴を把握し得意分野(歌・料理・習字など)での活躍の場を設けるように支援している。散歩や外出、ドライブなどでも気分転換が図れるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	月一回、季節を感じられる外出を計画し実行している。また日常的に利用者に合わせて散歩やドライブを行っている。	行楽の季節には花見や紅葉狩り、ドライブ等を楽しみ、毎月の外出支援には特に力を入れている。玄関の外は広いエントランスがあり椅子を置いて日光浴や外気浴をして気分転換をしたり、天気の良い日の散歩にもよく出かけている。	2年前までのミニ特養のような状態から脱し、全体的に活気が戻り元気な人が多いユニットもあるので、今の内に出来る限り家族の協力も得ながら集団或いは個別の外出の機会を作ってあげて下さい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前、「私の財布がない、お金がない！」と騒ぐ利用者がいたことがあり、現在お金を持っている方はいない。しかし、外出やドライブで店に入った時などは買いたい物があれば買えるようにしている。(事前に家族と話をしている)		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話の取次ぎは勿論のこと、希望時には電話をかけられるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間の大きな窓から見える花壇の花や畑の野菜などから、四季の移り変りを身近に感じることができる。又、室内にも季節を感じてもらえるように、季節に応じた飾りをするように気を付けている。	両ユニットを自由に行き来して合同でレクリエーションを楽しんでいる。今日も皆で輪になり体操したり男性職員のギターに合わせて歌を歌っている場面を見た。リビングにはソファ、テーブル等がほど良い間隔で配置され利用者は思い思いに自分の居場所で過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各人の個性や性格を尊重しながら席のセッティングに配慮するのはもとより、玄関のベンチで他者の気配を感じながらも一人になれる空間作りを行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用されていた馴染の家具の使用はもとより、家族写真や趣味の作品・誕生日の色紙など飾ることで安心できる環境作りにも努めている。	今年もAさんは健在でいつものように得意のピアノを自室で弾いて聴かせてくれた。西日本豪雨で被災しこのホームに入所した人の部屋はシンプルではあったが、安全な場所での落ち着いた生活が確保出来、インテリア等からも職員の温かい気配りが感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の入り口には、表札をだし部屋の確認ができるようにしている。ユニットの行き来は自由で、そのユニットの職員挨拶をしながら見守るようにしている。途中、玄関があるので外に出て行かないかを見守るようにしている。止めることなく、出て行くようであればついて行く。		